

## ハチソン『笑い』について

浜 下 昌 宏

〔一〕

フランシス・ハチソン(Francis Hutcheson, 1694-1746)は彼の最初の著作である『美と徳についての我々の觀念の起源に関する研究』(Inquiry into the Original of our Ideas of Beauty and Virtue, 以下『美と徳の研究』と略記)を公刊した一七二五年に、ジェイムズ・アーバックル(James Arbuckle, 1711)の主筆する『ダブリン・ジャーナル』誌に六つの論稿を寄せるが、そのうちの三編は続きものとして「笑い」を主題にしている。それが今日、『笑いについての考察』(Reflections upon Laughter)ないしは『笑いについての思想』(Thoughts on Laughter) などという題名で知られている論文集である(以下『笑い』と略記)。

この『笑い』は『美と徳の研究』と共に、ハチソンにおいて若年期にのみ現われた固有に美学的な関心の結晶である。にも拘らず、管見の限りでは、『笑い』を本格的に取り上げている研究は皆無と言える<sup>①</sup>。それゆえ我々の課題は『笑い』の美学史上の位置を確定することにあるが、諸々の制約上、本稿は未定稿たらざるを得ないとしても、『笑い』研究のための第一歩としたい。

ところで、『美と徳の研究』の第一論文、「美、秩序、調和、意匠に関する研究」(An Inquiry concerning Beauty, Order, Harmony, Design)を吟味することによって我々の得ることのできる<sup>②</sup>、ハチソン美学の基幹をなす問題点とは次のようなことである。即ち、道徳哲学者としてハチソンはシャフツベリを師と仰ぎながら、「美」

を論ずるに際しての彼の問い方は、シャフツペリの場合を「美とは何か」とするならば、「美の観念とは何か」ということになる。一方が「美」という実体を探究し、経験の次元で美との邂逅・脱我を求めめるのに対し、他方ハチスン  
は美を観念の様相として捉え、美の表象の何たるかを探究しようとするのである。それゆえ、シャフツペリにおける  
美の理念がプラトニスムとの関係で理解されねばならないように、ハチスンにおける美の観念はロッキ的な近代認識  
論との関係なしには理解は困難であろう。そこで、ハチスンにおいてロッキ的な「観念」理論の受容がいかなるもの  
であったかということも我々の研究課題となるわけである。そのような問題意識も持ちつつ、我々は『笑い』を取り  
上げようとするのである。

〔二〕

既述のように『笑い』の初出は“*The Dublin Weekly Journal*”においてであるが、三編の所載日は次の通りである。

June 5, 1725 (No. X, pp. 38-9)

June 12, 1725 (No. XI, pp. 41-2)

June 19, 1725 (No. XII, pp. 45-7)

著者名については、第三論文の末尾に“*Philomeides*”という署名がなされているのみであるが、後にアーバックルによつてそれらが『美と徳の研究』の著者の手になるものであることが明らかにされている(“*Dublin Journal*,” No. 102 及び, 1729 年版 II. P. 429)。

『笑い』が収録されている公刊本は次の四種類である。

1729 “*A Collection of Letters and Essays on Several Subjects, Lately published in The Dublin Journal*” (London, ed. by J. Arbuckle)

1734 同右第二版

1750 "Reflections upon Laughter, and Remarks upon The Fable of the Bees" (Glasgow, ed. by R. Urie)

1758 "Thoughts on Laughter, and Observations on The Fable of the Bees"

(Glasgow, 編者不明)

さて、本稿のために我々が参照しえたテキストは、"Collected Works of Francis Hutcheson" (1971, Olms)の第七巻に所収されているマックスミリア版の、『笑』初出の"Dublin Journal"と上記一九九九年版、そして、Peter Kivy 編の"Francis Hutcheson: An Inquiry concerning Beauty, Order, Harmony, Design" (1973, Nijhoff)に所収されている上記一七五〇年版に基づいて現代表記に直したテキストの、計三種である。

そこで当然、我々はテキスト間の異同を吟味しなければならぬわけであるが、Kivy 編のものはオリジナル・テキストを参照することができないので、まずなしうることは、"Dublin Journal"版と一九九九年版とを比較することである。その作業の結果、一七二九年版には、第二パラグラフに ARISTOTLE, in his Art of Poetry,... "云々というアリストテレスに関する言及が付加されていること、第三パラグラフの表現に若干の修正が加えられていることなどが注目される程度であり、Kivyの言うように「どの版においても実質的な変化はあるようにも思えない。」<sup>1)</sup>ただひとつ、今度はKivy版に眼を向けてみると、第一パラグラフにおいて、他の二つの版では、"a very common Subject, Laughter"となっているのに対し、"a very uncommon Subject, Laughter"となっている点<sup>2)</sup>が気懸りである。Kivy 版の元である一七五〇年版のオリジナル・テキストを参照できない以上、この変更が一七五〇年版において見られるものなのかそれともKivy版における単なるミス・プリントなのか、我々は確実な判断を下

することはできない。もし後者であるならば、ことは現在最も容易に入手しうる『笑い』のテキストの信頼性が問題となるだけに重大である。(この他、第二バLAGラフのアリストテレスからの引用で一語“*Sapienter*”の脱落が見られる。しかし一七二九年版と比較してみる限りでは、その他では不安を抱かせるような変更はない。)

それでは「笑い」は、当時“*common*”な主題であったのであろうかそれとも“*uncommon*”な主題であったのであろうか。この問題は別箇の研究を当然要求するが、簡単に触れておきたい。

まずシャフツベリに端を発する“*ridicule*”に関する議論が言論界を賑わしていた。<sup>⑤</sup>関係していた人名を列挙すると、*コリンズ* (Collins, A.)、*ブラウン* (Brown, J.)、*ラムセイ* (Ramsay, A.) 及び *ケイムス卿* (Lord Kames) 等々である。論点は“*ridicule*”は真理を検証するか否かをめぐってであったが、シャフツベリ自身の意図は宗教的狂信に反対する上で“*ridicule*”の社会的効用としての一種の緩衝作用を強調することにあつた。それが特にブラウンによって“*ridicule as a test of truth*”というように変容されてしまったわけであるが、ブラウン自身は嘲笑と論証とは別であるとしてその考えを斥けるのに対し、エイクンサイドは支持し、さらにウォーバートンがエイクンサイドに反論するというように議論は展開していったのである。

また、十八世紀のイギリス文化が再び古典主義的節度を志向する中で、作法の問題として「笑い」が論じられる傾向もあつた。<sup>⑥</sup>“*The Tatler*”、“*The Guardian*”、“*The Spectator*”、“*The Connoisseur*”等の有力紙、また *チェスターフィールド卿* (Lord Chesterfield)、*ヤング* (Young, E.)、*ボズウェル* (Boswell, J.) 等が、過度な笑いは格式ある作法や趣味に反することを説いたのである。

さらにハチスンの『笑い』においても、直接的にはホップズの考え方に反駁しながらハチスンはホップズの考えを採用した同時代人アディソンにも批判を加えている。

このようにして見ると、「笑い」は本当に「uncommon」な主題であったといえるのかどうか疑問である。しかし本稿における問題点はKivy版テキストの信頼性にあり、それは一七五〇年版のオリジナル・テキストを参照しさえすれば一挙に結論の出ることであるが、我々は暫定的に簡単な傍証を試みたわけである。

〔三〕

『笑い』が初めて公表された「Dublin Journal」は「シャフツベリの弟子を自認し」"Letters from the Right Honourable the late Earl of Shaftesbury to Robert Molesworth, Esq." (1721, London) という書簡集を残すことになったモウルスワース(Molesworth, R.)の影響力の下にあった。彼の紹介によってアーバックルは同誌の編集長となり、自ら幾多の論稿を発表する。このようにダブリンには、モウルスワース、アーバックル、ハチスン、さらにはバトラー(Butler, J.)等による「Shaftesbury coterie」<sup>7)</sup>が出来上がっていたのである。そこで我々の研究課題は、シャフツベリの思想を彼らがどのように摂取したかにあるが、その際最も遺憾とすることは、上記の人々のうち特にアーバックルに関して文献に恵まれていないことである。<sup>8)</sup>今でもなお唯一の体系的ハチスン研究書を残したスコット(Scott, W.)によれば、アーバックルの方がハチスンよりも美学的関心を持っており、その内容は「Letters to the Dublin Journal」(一七二五)において読み取ることができる。この著作はハチスンの『美と徳の研究』の数週間後に発表が始まっているが、準備期間も考慮に入れれば、近代美学の礎の創始者をどちらにすべきであるかということも係わってくる。但し、アーバックルにはそれ以降哲学的著作はないので思想家としての評価を定めるには不十分なのであるが。

さらにスコットの記述に従うと、シャフツベリとハチスンに比較してみた場合、アーバックルの思想には以下のよな特徴が認められる。まずシャフツベリが直観を重視するのに対し、彼は想像力が性格陶冶に重要な働きをなすと考える。またシャフツベリの残した問題点のひとつに、ギリシア的な人生観と人類愛の人生観とをどう調停させるか

ということがあるが、それと関係している目的の観念をめぐって、ハチスン人間（Ⅱ小宇宙）の持つ気質と、世界的（Ⅱ大宇宙）が有している目的との調和を考えるのであるが、一方アーバックルは徳はそれ自身美しい生として、目的の観念を排することに於いて成立していると論ずる。この両者の対比は換言すれば、前者が有徳の性格の根拠を、社会的善との外的な調和に求めるのに対し、アーバックルは親愛の情を持つ性格は内的な調和と性つまり美しさによってそうなのだ、と考えるわけである。さらにまた、美の観念について、ハチスンは数学的に捉え、諸観念の統一性に美を認めるのであるが、アーバックルは色や生命、形の戯れ（the play of feature）、さらに完全で求心的な性格を美の現われと考える。つまりハチスンにとって美は形而上学的均整にあると言えるのに対し、アーバックルにとって美とは感性的（aesthetic）調和にあると言えるのである。

さて、上述のようなアーバックルが編集長を勤める“Dublin Journal”に、ハチスンは『笑い』論稿を寄せたわけである。また、ダブリンにおける“Shaftesbury coterie”の一員として、『美と徳の研究』においては自らシャフツペリの弟子たることを認めているながら、然るに『笑い』において彼は、シャフツペリの“Ridicule”説に従うのではなくすでに独立的な論考を展開し、「笑い」の効用を倫理的側面からとり上げている。『笑い』以降、彼の関心は完全に道徳哲学的なものになっていくのである。

#### 〔四〕

『笑い』は三つの論文から成っている。第一論文はホッブズの「笑い」説を批判し、第二論文は自らの説を展開している。そして第三論文では、すでに道徳哲学者として、「笑い」の社会的効用を論じている。

さてそこで本稿においては、ハチスンの説の特徴を際立たせるべく、特に第二論文を主として取り上げ、ホッブズの説とも比較しながら、彼の「笑い」説の紹介と批判を試みてみたい。

第一論文の冒頭において、ハチスンは『笑い』論考の狙いを次のように述べている。即ち、彼が『笑い』を公表す

るのは、「〔笑う際には〕我々自身の心の中でどのようなことがしきりと起っているのかを理解し、そして我々の本性の仕組みにおいて笑いがそのためにあるような効用が何であるかを知る (to understand what so often happens in our minds, and to know the use for which it is designed in the constitution of our nature)」<sup>(6)</sup>ためである」と。この一節の前半部分、つまり「笑い」を心に引き起す原因の論究については第一論文と第二論文において、そして後半部分、つまり「笑い」の効用については第三論文で扱われていることは既に述べた通りである。

「笑い」の説明を試みるにあたってハチスンがまずすることはホッブズ批判である。ホッブズは「笑い」を次のように説明している。「笑いとはまさに突然に生じる得意のことである。そのような得意は、他人の欠点とか以前の自分と較べることによって自分自身の内にある何らかの力について突然に抱くある観念から生ずるものである

(Laughter is nothing else but sudden glory, arising from some sudden conception of some eminency in ourselves, by comparison with the infirmity of others, or with our own formerly)。<sup>(7)</sup>」(下線部は引用者による。後述参照のこと。)この考え方をハチスンは註釈して、ホッブズ氏の見方は一切の人間行為を自己愛によるものとするのであるが笑いもまた同じ原理で捉えている、と述べる。そして次のような二点の反論を加える。即ち、

- (1) 「もしホッブズ氏の考えが正しいとすると、次のような場合は全く笑いが起り得ないことになる。まず我々と他人、または我々の現在の状態とより悪い状態とを比較することを全くしない場合、さらに何らかの他の事物に対する我々の優越を認めない場合。(If Hobbes's notion be just, then, first, there can be no laughter on any occasion where we make no comparison of ourselves to others, or of our present state to a worse state, or where we do not observe some superiority of

ourselves above some other thing)」（下線部は引用者）

- 〔1〕「ホップズ氏の考えの帰結として、ある他者に対する優越が突然現われるならどの場合でも、我々がそれに気づけているなら、必ず笑いを起さなくてはならないことになる（it must follow, that every sudden appearance of superiority over another must excite laughter, when we attend to it）」  
 （下線部は引用者）

ハチスンが挙げる反証例は、優越感がなくても戯作には笑いがあること（原作者への尊敬は失っていない）、模倣による笑いは優越感とは無縁であること、また優越があっても笑いの原因とはならない場合もあること、突然の優越感も笑いにつながるとは限らないこと、等々である。

さて、ハチスンの反論を見て気付くことは、彼がホップズによる「笑い」の説明を、「優越（superiority）」によって生ずるもの、と理解していることである。確かにホップズの文脈からいくと、そのような理解の仕方も可能である。自他を比較することは優劣を判断することでもあるからである。しかしながらホップズのテキストには「優越」という表現はなく、彼は「力（eminency）」と語っているのである。ホップズによる「笑い」論は、*Human Nature* 第九章と「*Leviathan*」第一部第六章とに出ており、共にほぼ同じ内容であるが、「一語も「優越」という語は使われていない。そこで先に引用したホップズのテーゼをもう一度見てみよう。

「笑い」とは突然の「得意（glory）」である、とホップズは言う。では「得意」とは何か。それは「我々と争っている者の力より上の我々自身の力についての想像ないし観念に由来する情念（the passion which proceeded from the imagination or conception of our own power above the power of him that contended with us）」とされる。無論そこには「優越感」も潜んでいるであろう。しかし要点はあくまでも自分の「力」に対する認識にある。



また我々が「力」と訳した「eminency」という語については、ホッブズは次のような文脈で使っている。「(人間)の(生来の力とは、身体ないし精神の諸能力の eminence のことである (Natural power, is the eminence of the faculties of body, or mind))」<sup>14</sup>「eminency」の持つ「優越」の観念は、比較して後の相対的な差異の判断に基づくというよりも、そのものがすでに「顕著 (ex-mineo)」なものとして已れの「力」を示していることを含んでいる。

それゆえホッブズの「笑い」説は、他者と比較して自分が優っているという勝ち負け的な「優越」に留まることなく、その優越によって証示している「力」にこそポイントがあるのであるではあるまいか。

とまれハチスンの場合は、以上見てきたようにホッブズを批判しているわけであり、次にハチスン自身の「笑い」説を検討しなければならない。

〔五〕

『笑い』の第二論文においてハチスは、ホッブズとは別の、「笑い」の根拠について探究しようとする。彼はまず、「Spectator」誌 No 四一―から No 四二―まで掲載されたアディソンの“The Pleasures of the imagination”において展開されている考えの援用をする。

アディスンによれば、快の感情は「偉大 (great)」、「新しさ (new)」、そして「美 (beautiful)」のどれかであるような対象に由来し、不快の感情はその逆に「狭さ (narrow)」、「歪み (deformed)」、や「不整合 (irregular)」な対象に原因を持つ。この場合「偉大」、「美」または「調和」、さらに「卑しさ」、「歪み」等々の観念に関して、その対象となっているものは単に物質的対象のみならず、「性格 (character)」、「能力 (ability)」さらに「行為 (action)」などもそうである。そしてそのような観念は、五感官のうちどれにも由来するものではない。――このようなアディソンの考え方はいうまでもなくロックの「観念」説に基づいており、換言すれば次のように言うことが可

能である。例えば、「赤」、「熱さ」、「固さ」等の諸観念は物質的対象を原因として五感官を介して得られる。然るに、「美」とか「醜」というような観念は、物質的対象とのみ係わる五感官によるとは別様の認識によって、物質的対象のみならず、人間の性格、諸能力、行為などからも得られる。

さて、ハチソンは上述のアディソンの説を援用してさらに次のように言う。<sup>⑤</sup>我々は「奇妙な観念連合 (strange associations of ideas)」によって、多くの事物に関して上に挙げたような諸観念を持つことがしばしばある。

例えば教会においては「神々しさ」、公共の建築物に関しては「荘大さ」、空や海、山については単なる広がりイメージとは別の「偉大さ」の感情、あるいはろばは「愚鈍」や「怠惰」の寓意 (emblem) となり、豚は「利己的な贅沢」、ライオンは「剛勇」の観念と結びつく。その他植物についても同様のことが生じる。そのような観念は、「教会」、「空」、「ろば」等という「主要観念 (principal idea)」から見れば、「付屬的観念 (accessary idea)」ないし「附加的観念 (additional idea)」と呼ぶべきものであり、それが生ずるのは「自然的理由 (natural reason)」であつたり、もしくは、自然的理由以上にしばしば「単なる偶然と習慣 (mere chance and custom)」であつたりする。

またアディソンはロックに従つて「機知 (wit)」を類似性の発見能力、「判断力 (judgement)」を差異性の発見能力と考えたわけであるが、ハチソンの考えでは、人がそれまで全く思いつかず、それゆゑ驚きの快を与えてくれるような観念の結びつきをもたらすような才人は、単に「機知」と呼ぶには不十分であり、「容易ならぬ機知 (grave wit)」と呼ぶにふさわしい。<sup>⑥</sup>事物の観念に対して、寓意となるような観念は、確かに天才による発見を必要とする。しかしながら、この「容易ならぬ機知」も一歩誤れば「笑い」を惹起することになるのである。「この大事な機知において、イメージの偉大さを切望してはいなくても、ある事物を下劣ないし醜悪と表現しようと努める場合は別として、我々はなお下劣ないし醜悪の観念をもたらしたりしないように警戒しなくてはならない。」 (In this seri-

ous wit, though we are not solicitous about the grandeur of the images, we must still be aware of bringing in ideas of baseness or deformity, unless we are studying to represent an object as base and deformed.)<sup>(8)</sup>

以上の考察を経て、ハチスンは「笑い」について次のような二つのテーゼを立てるのである。

- (一) 「一般的に笑いの原因と思われることは、主要観念においては何らかの類似性を有しながら、付加的観念に關して逆のものを有する複数のイメージを一緒くたにすることである。偉大、威厳、神聖、完成等の諸観念と、凡庸、低劣、凡俗等の諸観念の間に生ずるこの対比が、まさに道化の精神であるように思われる。そして我々のゆる諷刺や冗談の大部分がこのことに基づいてゐる。」(That……which seems generally the cause of laughter is the bringing together of images which have contrary additional ideas, as well as some resemblance in the principal idea ; this contrast between ideas of grandeur, dignity, sanctity, perfection, and ideas of meanness, baseness, profanity, seems to be the very spirit of burlesque ; and the greatest part of our raillery and jest is founded upon it.)<sup>(9)</sup>

(二) 「我々はまた機知が過度に使われている場合も笑わされる。つまり、較べてみると全く異なる種類のものである主題から類似性をひき出しているような場合に。真の機知を示す理解の容易で自然な類似性を見るのではなく、我々が強引で行き過ぎであるような類似性を見ると、笑いが生ずるものである。それはまた、類似性が観念の中にはなく語の音の中にある時も同様である。そしてこれが、しゃれにおける笑いのことである。」

(We also find ourselves moved to laughter by an overstraining of wit, by bringing resemblances from subjects of a quite different kind from the subject to which they

are compared. When we see, instead of the easiness, and natural resemblance, which constitutes true wit, a forced straining of a likeness, our laughter is apt to arise; as also, when the only resemblance is not in the idea, but in the sound of the words. And this is the matter of laughter in the pun.<sup>(2)</sup>

さて、以上のテーゼについて鍵になってゐる考え方は、まず、観念であれ音であれ思惟において対象化しうる事物同士を比較するということであり、ホップズのように自他の比較ではない。そして第二に、比較の際の類似認識と対立の認識とが「笑い」の原因を作る、とハチソンは考えている。ではこのような特徴から、彼の「笑い」説についてどのようなことが導かれるか。それはすでに彼自身が論じていることでもある。

ハチソンの言う観念は経験によつて作られるものである。それゆゑ、「偉大」の観念と言つても個々の人間が持つその観念内容は千差万別なのである。彼の表現によれば次のように言うことができる。即ち、「個々人の持つ威嚴の観念や知恵が多様であるのに従つて、行為や性格に対する諷刺の気持には、当然非常な多様性が生ずるにちがいない。」<sup>(2)</sup>

(there must necessarily arise a great diversity in men's sentiments of the ridiculous in actions or characters, according as their ideas of dignity and wisdom are various.)

また、基本となる観念に対して、類似や対立の認識を与える付加的な観念が合成されるのはいわゆる観念連合によるのであるが、そのような観念連合は習慣や教育等によつて左右される。ということは、風俗習慣の異なるところでは自ずと「笑い」も異なる、ということである。ハチソンは言う、「ある時代ないし民族において可笑しいと考えられていることからは、別の時代や民族においてはそうではないかも知れない。」(what is counted ridiculous in one age or nation, may not be so in another.)<sup>(2)</sup>

〔六〕

以上みてきたように、ハチンスンの「笑い」説もまたロックの「観念」説の影響下にある。それゆえ、ホップズの「笑い」は実体的な「力」の差異比較に拠るとすれば、ハチンスンの「笑い」は単なる視点の問題に帰着してしまうような観念上の差異比較に拠っている、と言うことができる。「笑い」が人間本性においてその存在や本質に係わるというよりも、人間におけるものの見え方や表象に係わっている、とハチンスンの立場からは考えるわけである。しかし彼は人間本性に対する「笑い」の効用については語っている。それが『笑い』の第三論文の主題なのであるが、我々としてそれを取り上げることは、未定稿である本稿を整理し直すことと併せて、別稿の課題にしたい。

〔註〕

- ①彼が三十四才で死んだということは伝えられるが、詳しい生没年は判明していない。Scott その他の研究を総合すると、一六九七〜一七〇〇に出生、一七三一〜一七三四に他界したとす。cf. W. R. Scott: "James Arbuckle and his relation to the Molesworth-Shafesbury School," *Mind*, N. S. Vol. VII. № 30 (April, 1899) 及び *Dictionary of National Biography* (1908), "Arbuckle" の項。
- ② Th. Fowler による研究にはわずかであるが論及されつつある。cf. Thomas Fowler: *Shafesbury and Hutcheson*, 1883, New York, PP. 173~177.
- ③この成果の一部は『ハチンソンにおける「美の観念」について』という題で、昭和五十三年六月十一日の演習 'Colloquium Calonologicum' におおづ口頭で発表された。
- ④ Peter Kivy, ed.: *Francis Hutcheson: An Inquiry concerning Beauty, Order, Harmony, Design*, 1973, The Hague, P. 2.
- ⑤この問題については詳しい研究には次のものがあがる。Alfred O. Aldridge: "Shafesbury and the Test of

Truth," PMLA, 60, 1945.

⑨ cf. Francis Galloway: Reason, Rule and Revolt in English Classicism, 1966, Lexington (1st ed. 1940), Pp. 251 f.

⑩ William Scott: Francis Hutcheson, 1966, New York (1st ed. 1900) P. 182

⑪ 著『フット・ハッチェンソンに関する記述は Scott の研究 (註⑩と⑪) を整理したものである。

⑫ ed. Kivy (註④) P102. ed. 1729. P. 77 原文の引用は『現代表記の Kivy 版』の (フット・ハッチェンソン)

⑬ ed. Kivy, P. 103, ed. 1729. P. 78. cf. Thomas Hobbes: Human Nature, 1650, 2nd 1651. chap. K13

⑭ ed. Kivy, P. 103. ed. 1729. P. 79.

⑮ ed. Kivy, Pp. 103f. ed. 1729. P. 79

⑯ Thomas Hobbes: Human Nature, Chap. X. I.

⑰ ibid. Chap. x. (cf. D. D. Raphael ed.: British Moralists 1650 - 1800. vol.1, P. 29)

⑱ ed. Kivy. P. 108. ed. 1729. Pp. 87f.

⑲ ed. Kivy. P. 109. ed. 1729. Pp. 88f.

⑳ ed. Kivy. P. 109. ed. 1729. P. 89.

㉑ ed. Kivy. P. 109. ed. 1729. P. 89.

㉒ ed. Kivy. P. 109. ed. 1729. P. 90.

㉓ ed. Kivy. Pp. 109f. ed. 1729. P. 90.

㉔ ed. Kivy. P. 111. ed. 1729. P. 93.

㉕ ed. Kivy. P. 112. ed. 1729. P. 95.

であるような対象に由来し、不快の感情はその逆に「狭さ（ narrow ）」「や」「歪み（ deformed ）」「

であるような対象に由来し、不快の感情はその逆に「狭さ（ narrow ）」「歪み（ deformed ）」「や」「不整合（ irregular ）」「な対象に原因を持つ。この場合、「偉大」、「美」または「調和」、さらに「卑しさ」、「歪み」等々の観念に関して、その対象となつてゐるものは単に物質的対象のみならず、「性格（ character ）」「能力（ ability ）」「さらに「行為（ action ）」などもそうである。そしてそのような観念は、五感官のうちどれにも由来するものではない。このようなアディソンの考え方はいふまでもなくロックの「観念」説に基づいており、換言すれば次のように言うことが可能である。例えば、「赤」、「熱さ」、「固さ」等の諸観念は物質的対象を原因として五感官を介して得られる。然るに、「美」とか「醜」というような観念は、物質的対象とのみ係わる五感官によるとは別様の認識によって、物質的対象のみならず、人間の性格、諸能力、行為などからも得られる。